

< 2020年 7月 >

古賀 順子

## 「COVID 19 パリ祭」

今日は7月14日「パリ祭」。

花火大会、野外ダンスパーティー、1,91kmのシャンゼリゼ通りを埋め尽くす人で賑わう「軍事パレード」など、「パリ祭」はフランス国民を一つに集結する大切な行事であるが、今年は COVID-19 の影響で縮小せざるを得なかった。

ガルド・レピュブリック(騎馬隊)を先頭にフランス陸・空・海軍がシャンゼリゼ通りを行進する例年のパレードは断念し、国会議事堂前のコンコルド橋からコンコルド広場への移動のみで、観客のいない特別の式典となった。この4ヶ月間最前線でコロナウイルスと闘ってきた医療関係者、緊急事態下、市民の日常生活を支えた清掃業者、スーパーの職員など裏方へのオマージュだった。

夏のバカンスが本格化するフランスだが、コロナ・ウイルスは今も流行している。フランスのコロナウイルスによる死者は3万人を超え、感染者数も17万2千人を上回っている。ブラジルと国境を接する仏領ギユアンヌ県では救急医療が逼迫し、マイヨヌ海外県も感染者が増える一方だ。フランス本土も各地で新たなクラスターが発生し、油断できない状況が続いている。「感染症危機」は現在も進行中であるが、3月・4月との違いはウイルスとどのように共生しなければならないかを学んだ点だ。マスクのストックはある、重症患者の治療法もある程度は確立できた、救急医療体制も準備できる、そして何より PCR 検査、抗体検査が広く一斉に実施できる、つまり検査と隔離を繰り返す予防体制ができたことだ。有効な薬かワクチンができるまで時間を稼ぎ、感染爆発を避けなければならない。

「感染症危機」が招いた「経済危機」は次の世代に大きな借金を残すことになる。フランスは昨年11月から始まった「黄色いベスト(ジレ・ジョーヌ)ストライキ」、12月「年金改正法反対デモ」に続く国内閉鎖

である。この8ヶ月で「タチ(TATI)(廉価の衣料チェーン店)や「ダマール(Damard)(ウール下着メーカー)などフランス人に馴染みの企業が倒産の危機に瀕している。航空関連企業も厳しい状況で、コロナ対策で中国人とアメリカ人が渡航禁止でフランスに入国できず、観光産業への打撃も計り知れない。7月10日フランスの緊急事態宣言が解除され、デイスコやナイトクラブなどを除き、ほとんどの業種が営業を再開しているが、第二波は免れないのが大方の予想で、例え第二波が来ても経済破綻を考えれば前回と同じ国民総自粛はもう二度とはできない。

そして「感染症危機」と「経済危機」はフランス人の「国民性の危機」を浮き彫りにした。55日間の外出制限は富める層と貧困層の格差や社会の不平等を明らかにし、コロナ重症患者受入は国公立病院の貧困化を訴えた。介護や看護に携わる人たちの給与や労働条件の改善が早急の課題となっている。歴史的にも移民や難民を広く受け入れてきたフランスの精神性が貧困化し揺らいでいる。今こそフランス国民の意識を再建しなければならないが、問題は山積みで簡単ではない。幸か不幸か、外出制限や国境閉鎖はこれまでの消費のあり方を反省し、大型多量消費から地元の小さな産業を支え、団体の海外旅行から近距離の国内旅行を見直し、フランスのアイデンティティを問い直す機会を与えている。

多くの市町村で中止となった「パリ祭」の花火だが、パリ市はエッフェル塔で花火が上がった。パリの美しい夜空に輝く花火はとても美しかったが、人のいない花火は寂しい。歓声のない行事は張り合いがない。人と人が身近に接し、心が通い合い、信頼関係を築く。人間関係の基本は変わらないが、コロナ対策の制限とどのようにバランスをとっていくか、一人一人の責任と他者への配慮にかかっている。人の表情が隠れるマスクは、相手の顔を見て話すフランス人にとっては不信任の象徴で、ましてや暑い夏には耐えられないと嘆くのも無理はない。強制しなくても99%の人がマスクを着用して外出する日本、コロナ感染が拡大しない決定的な理由だろうと思う。